



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 3 月 6 日 (木)

発行 館長 加藤 智 一

ミイラの匂い

Journal of the American Chemical Society に公開されている内容によると、あの古代エジプトの「ミイラ」は、「ウッディでスパイシーで甘い香り」がするらしい。え!! 今回、こんな「ミイラ」の匂いについて科学的に研究したのは、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンの研究チームです。どのような手法で調べたのかというと、「ガスクロマトグラフィー」と「質量分析法」という手段を用いて、ミイラ自体には、いっさい傷を付けず、鼻のいい人がクンクンしたわけでもなく、カイロにあるエジプト考古学博物館に保管されている 9 体のミイラから放出される分子（匂いの元は分子なのさ）を化学的に解析した結果なのだそうです。

みなさんご承知の通り、古代エジプトの「ミイラ」は、自然にできたものではありません。腐敗しやすい内臓を取り出し、体の内外に防腐剤や香料を擦り込んで乾燥させるなど、様々な腐敗処理を施しています。その過程で松の樹液やフェノール、安息香酸といった防腐剤も使われたようです。ですから、「ウッディでスパイシーで甘い香り」というのも、ある意味想定内の結果だったのかもしれない。

ところで、「ミイラ」と言えば、江戸時代。日本にも輸入されていたことをご存じでしょうか。しかも薬として使っていたのです。「ミイラ」の効能はというと、江戸時代の人々は、朝鮮人参と同じような万能薬だと信じていたようです。薬効としては、肺病・子宮の出血・胃腸炎・めまい・頭痛など。また、水で練って体に貼る、今で言うシップのような使い方もされておりました。飲み薬としても貼り薬としても使える、薬草のような感覚だったのでしょうか。しかも「ミイラ」なら何でも良いと言うわけではありませんでした（そりゃそうだ）。一番人気はやはりエジプト産。ミイラの薬は世界中で大人気でしたので、かなりの高値で取引されたようです。そうすると当然粗悪品も出てくるわけで、ミイラブームに便乗したアラブ商人が、奴隷の遺体で即席ミイラを作り、エジプト産と銘打って売り付けていたという話もあります。乾燥してしまえば、エジプト人であろうとその他の国の人間であろうと、変わりはないということで、原産地を偽ることは今も昔も良くある話だったのでしょう。

また、チョット面白い話としては、初めて長崎にミイラが入ってきたのは 1673 年。長崎商館の仕訳帳によると、1673 年にオランダ船から 300kg のミイラが長崎に入ってきたと記録にあるそうです。完全乾燥したミイラは 5kg ほどだと言われていますので、単純に計算すると、なんと 60 体のミイラが輸入されていたこととなります。江戸時代の日本は、ミイラの主要輸出先のひとつだったようです。江戸時代の将軍や大名にも人気があり、あの 8 代将軍徳川吉宗も 1743 年にミイラを注文していたという記録が残っているようで、万能薬としての「ミイラ」はメジャーな存在だったようです。



キツツキがくちばしで木の幹をコツコツと叩いても脳にダメージを受けない理由とは？



『眠れなくなるほど面白い 図解 ハンター生物の話』によると、キツツキの仲間は世界中に 254 種もいると言われており、ほとんどは鋭く尖ったくちばしで木に穴を開け、中にある虫を捕食します。キツツキは、くちばしで木の幹をコツコツと叩くだけで中に昆虫や昆虫の幼虫、クモなどの獲物があるかどうかを判断します。獲物があると分かれば、くちばしで厚い樹皮を剥がして穴を開けます。そして、長い舌を使ってつまみ出し捕食します。また、キツツキが木をつつくのは、獲物を探しているときだけでありません。縄張りや異性へのアピールのためにも行います。獲物探しや縄張りアピールなど何かと木をついているキツツキですが、意外にもくちばしや脳がダメージを負うことはありません。キツツキの脳はとても小さく、頭蓋骨にぴったりと収まっているため脳が揺さぶられない構造になっているのです。木とくちばしの接触時間も 0.5~1mm 秒ととても短く、脳を守る要因の一つと考えられています。また、キツツキのくちばしはとても丈夫で、くちばしとアゴをつなぐ筋肉も非常に発達していて衝撃を吸収・分散してくれます。さらに長く伸ばせる舌を持つことで、ダメージを負わずに効率よく獲物を捕らえることができるのだそうです。